

第三講 歴史主義：近代歴史学とその危機

【本日の課題】 歴史学とは何か？

過去をあるがままに理解する（ランケ）

ジョージ・P・グーチ（林健太郎・孝子訳）『19世紀の歴史と歴史家たち』（上・下）筑摩書房、1971・74年。

スコットの作品の荒唐無稽さに衝撃を受ける。

19世紀の科学としての歴史学。

歴史家から歴史学者へ＝職業としての歴史研究者（大学）

史料批判（外的批判と内的批判）：近代の産物（文献学の発展）

権威と同時代性を基準。

文献学の発展。

『コンスタンティヌス帝の寄進状』：病気を教皇シルヴェステル1世の洗礼によって治癒・教皇に西ヨーロッパにおける支配権を譲る。

8世紀中ごろに東ローマ帝国の干渉に抵抗するために偽造←726年

レオン3世による聖画像崇拜禁止令をめぐる危機。

ロレンツォ・ヴァッラによる批判（15世紀）。

ローマ時代のラテン語の用法と異なる。

科学（Wissenschaft）としての歴史学の確立。

自然科学（Science）との相違。

研究方法としての厳密性。

史料批判・・・外的批判・内的批判。

権威。

同時代性。

国家を独立した意思を持つ至高の存在ととらえる。

外交に着目。

外交官の意思と合理性。

国内の様々な圧力から独立。

内政の排除。

テキストをベネツィア大使の外交報告書(国家文書・行政文書)に求める。

←客観性を求める。

『ローマ的ゲルマン的諸民族の歴史』(*Geschichte der romanischen und germanischen Völker von 1494 bis 1514*, 1824)

『近代歴史家批判』(*Zur Kritik neuerer Geschichtsschreiber*, 1824)

グイッチャルディーニを批判。事実の歪曲と誤認。二次史料に依存。
経験的に解釈と評価(経験主義的解釈学)。

「本来いかにあったか *Wie es eigentlich gewesen.*」

事実を国民史の枠組みの中に埋め込む。

ベルリン大学でゼミナール形式による授業。

→歴史を外交史に特定(歴史主義の起源)。

→公文書の主観性・プロパガンダ性・民衆を無視。

→国家のイデオロギーを代弁。

大学という教育・研究機関の存在。

歴史学者の卵はどこで教育され、研究し、評価されていくのか。

大学という場の存在。

教育を通じて方法論・社会的帰属意識・階級的価値観・国家観の共有

→ギルドの形成。

宗教的：プロテスタント。

民族的：ユダヤ人の排除。

政治的：自由主義。

社会的：中産市民層。

国民国家を基礎とする外交史・経験主義的解釈学・外交官僚に対する信頼
(君主や貴族層からも民衆からも自立し、価値中立的という信頼)。

文化史論争(ランプレヒト：他者の排除)

教授資格 *Habilitation*(ギルドからの逸脱を規制)

外交史

参考文献

L・v・ランケ(山中謙二訳)『ローマ的・ゲルマン的諸民族史』

千代田書房、1948年。

ゲオルク・G・イッガース（中村幹雄・末川清・鈴木利章・谷口健治訳）

『ヨーロッパ 歴史学の新